

マツ並木歴史ばなしあれこれ⑦

中山道を描いた浮世絵の揃物『木曾海道六拾九次之内』の「式拾六 望月」と「式拾七 あし田」とが、図柄が取り違えられているという話を聞きます。

これについて、立科町誌では、『「あし田」の図の樹木は杉並木に見える』『「望月」の図は峠道の松並木である。』『文献史料から八幡宿から望月宿までの間に並木がないことが明らか』との理由で、「取り違い」とは書かないものの「望月」の図は「笠取峠の松並木をモチーフにしたのではあるまいか」と結んでいます。この記述は、古文書を用いて「望月」の図が望月宿以東の景観でないことを端的に指摘する一方、それが笠取峠の景観である根拠については、十分説明はできていないと思われます。

そこで、2回に分けて、笠取峠のマツ並木保存管理計画書のコラム「広重が描いた笠取峠の松並木」において「浮世絵風景画（名所絵）に描かれる景観」の視点から図柄の取り違えが検証されていることを紹介します。



『木曾海道六拾九次之内』の「式拾七 あし田」
財団法人 中山道広重美術館所蔵



『木曾海道六拾九次之内』の「式拾六 望月」
財団法人 中山道広重美術館所蔵

今回は、広重が佐久地方の作品群に描いた主題はどんなものか考えてみます。

「望月」では、画面左端に透視遠近法の消失点が設定され、そこに収斂する旅人のラインと松の梢のラインが構図を規定しています。これを見る限り、「峠と松並木」が主題だとしか解釈のしようがありません。

一方、「あし田」では、画面の右上方から一気に画面の下辺に下る「急な下り坂」が主題で、大きく上下に湾曲する道の底辺に小さく描かれた茶店と、実際より急峻に描かれた浅間山を隠すように伸び上がる誇張された表現は、「坂道」そのものが主題あることを強く主張しています。

次回では、「望月」と「あし田」が取り違えられているとして、「峠と松並木」、「坂道」は、それぞれ現地の景観と合致しているのか比較をしてみます。